

# ふれあいの発進



社団法人 南宇和郡医師会  
 老人保健施設  
 なんぐん館  
 南宇和郡御荘町深泥703-2  
 TEL. (0895) 73-1021  
 発行責任者 施設長 兼吉 章

## 施設理事あいさつ



施設理事 水野 伸二

平成十年六月一日に当施設を開設して、すでに二年以上が経過しました。今回は元気の出るような話題を提供しようと思えます。さて、九月十五日の敬老の日の朝、民放で「八十歳健康時代がやってくる！」これが二十一世紀の医療・介護」という番組を放送していました。この中で、最後に何気なく登場した飛んでるお坊さん（京都東本願寺住職 大谷演慧 八十五歳）の発言が、非常に印象的なものでした。

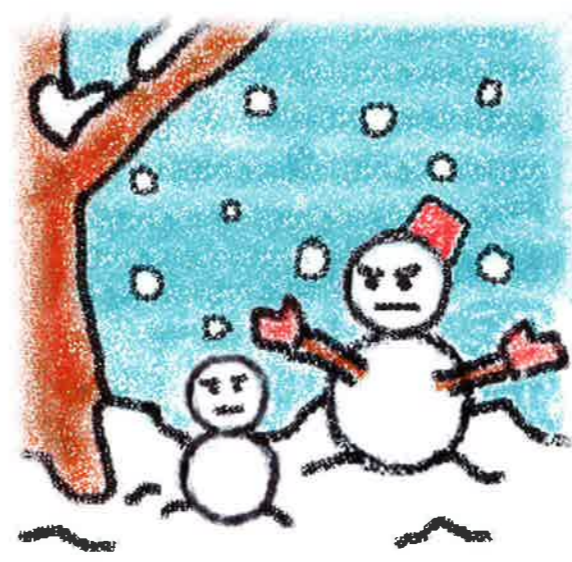
彼の健康の秘訣は、朝のお勤めで大きな声を出すことと趣味であるマイククワイトプレーンによる大空の散歩だったのです。彼は、朝のお勤めという行為によって、仏との心のふれあいを毎朝実践して精神的な充実感を与えられるとともに、大きな声を出すことによって、早朝の澄んだ空気を体内にいっぱい取り込み、立派な呼吸法を実行しているのです。さらに、大空の散歩によって大自然とのふれあいを楽しんでいるのです。一見、とてもない生き方に映るかもしれませんが、大変理に叶った、精神的にも肉体的にも充実した老後の生き方の一つの手本のように思い、強く感銘を受けました。

人間は、いろいろな「ふれあい」、つまり自分以外のものとの接触によっていろんな刺激を受けて、精神的・肉体的充実感を得るものです。それは、生まれてから死ぬまで同じだと思います。

幸い、二十一世紀は、通信技術の発達によって肉体的に衰えた老人であっても、精神的には莫大な「ふれあい」の機会を持つことになりそうです。ただ、それにも限度があることはしかたがありません。

しかしながら、肉体的衰えも適切な介護を受ける事によって、かなり補うことが可能であり、また、直ちに介護を受ける行為は、若者との「ふれあい」の絶好の機会でもあるのです。

「なんぐん館」が、そういう適切な介護と若者との「ふれあい」の場を提供する事によって、南宇和地域を理想的なシルバースティにするための核になることを望んでおります。



昨年後半に開催された主な行事を紹介いたします

## 納涼祭

八月十一日なんぐん館の海側にある中庭で、納涼祭が開催されました。当日は事故もなく無事、盛大に終えることが出来スタッフ一同ホッとしています。

少し裏話をさせてもらおうと、六月頃から事務の田村さん、栄養士の若本さんと、納涼祭に向けて企画を始めていました。去年は、天候に悩まされたので、今年も当日までハラハラとさせられました。良い天気にも恵まれ、今年初めての企画でもあった花火をあげることでできました。この花火が、今年の納涼祭でのメイン企画だったように思います。これは以前より入所者の方に花火をぜひ見てもらいたいということで二事務長の協力のもと企画立案されました。施設の花火ですから、皆は、「どうせたいしたことはない」と思っていたのではないのでしょうか。



皆さんご存知の通り、なんぐん館の周辺には、民家も少なく海側ということもあり、警察の許可もあり、見事な花火を上げることができました。実際に花火が打ち



上げられると「怖い」と逃げの方「すごいね、きれいやね」と感動される方と、反応もそれぞれで、いつもは見ることのできない表情を見ることができ、スタッフとしても嬉しい一時でした。

その他の企画としては、焼鳥やお好み焼き、おでんなど、たくさんのお店も出店し、他機関、他部門の協力を得ておいしくできあがりしました。

今年は前記の通り、海側で開催したこともあり、来年の宣伝にもなったと思います。最後に、協力して頂いた皆さん、ありがとうございました。

来年もよろしく願います。

利用者の皆さん、家族の皆さん、来年も期待して下さい。皆で盛り上げましょう。

(記者名) 安田 佐代

## 敬老会

九月十五日の敬老の日に、なんぐん館の二階八角棟で敬老会を行い、平城小学校から先生と児童の皆さん、合わせて約六十名の方に参加していただきました。

内容としては、平城小学校ボランティア部による劇「古家の森」(民話より)、続いて音楽クラブの合唱メドレー(「もみじ」「ふるさと」「赤トンボ」)でした。劇もよく、合唱もとても素晴らしい歌声でした。合唱の



(記者名) 山田 太一

方は、入所者の皆さんも一緒になって全員で歌いました。

敬老会のお祝いとして、入所者を代表して、一階から和田フサ子氏、二階から西山フジ子氏に記念品を贈らせていただきました。記念品は入所者の皆さんの写真を事前に撮影し、写真立てに納めたもので皆さんとてもいい笑顔で写っていました。

会の最後に、一階の清家アキエさんより「みんなに祝ってもらってこんなに嬉しいこととはありません。また遊びに来て下さい」と代表してお礼のお言葉をいただきました。

会も終わり、平城小学校の児童の皆さんが帰られるときには、皆別れを惜しみ、全員で握手をしました。

今回の敬老会では、入所者の皆さんと、児童の皆さんとのふれあいの場を持つことができ、よかったですと思います。またこれからもこのような機会を作っていきたいと思えます。それでは皆さん、これからもお元気で長生きして下さいね。

# 8・9・10・11月の誕生日者紹介



長尾 ヨシ 様  
九十三歳  
明治四十年  
八月五日



松江 澤恵 様  
七十八歳  
大正十年  
八月四日



岡野ユキコ 様  
八十四歳  
大正五年  
八月二日



原田チエコ 様  
八十三歳  
大正六年  
九月五日



水尾清五郎 様  
九十二歳  
明治四十一年  
八月十一日



清家アキエ 様  
八十四歳  
大正五年  
八月五日



吉村ヤスノ 様  
八十五歳  
大正四年  
九月二十三日



吉田 ケイ 様  
九十五歳  
明治三十八年  
九月十六日



澤近 玉恵 様  
八十三歳  
大正六年  
九月十五日



林 タマコ 様  
七十五歳  
大正十四年  
十月二日



北原 隆子 様  
七十九歳  
大正九年  
九月二十八日



浜野 信男 様  
七十八歳  
大正十一年  
九月二十四日



河野 國子 様  
七十八歳  
大正十年  
十月二十六日



中田 徳一 様  
六十九歳  
昭和六年  
十月三日



山田 博 様  
七十一歳  
昭和四年  
十月二日

# 運動会



十月六日 第三回なんぐん館運動会が開催されました。正面玄関横の駐車場に会場を作り、入所者の皆さん、家族の皆さん、職員と皆で白熱した競技を繰り広げました。鯛食い競争では皆さん童心にかえり手も使わずに鯛焼きを上手に口でつかまれています。  
玉入れでは、競技に参加する利用者の皆さんと各フロアのスタッフとで協力し合い、どうすれば他チームよりたくさん玉がカゴに入るかと考えながら競技が進んでいきました。



仮装では、「お魚」をテーマに各フロア趣向を凝らしたパフォーマンスを行ってくれました。1F赤組は「人魚姫」を寸劇風に。2F白組は「魚屋さん」をダンス風に。デイ・ケア青組は「人魚姫」を華やかに送られました。  
優勝チームには総合得点を沢山獲得した赤組が見事にトップの座に輝きました。来年も各チーム優勝目指して頑張りましょう！  
(記者名) 編集部

# 文化祭

十一月十七日に第三回なんぐん館文化祭が開催されました。入所者・通所者の皆さんの日頃の作品を各フロアの廊下・談話室等に展示し、皆さんの毎日の作業活動の成果を観ていただきました。日頃の想いを た俳句や短歌も好評でした。また、入所者が生けた生花も色とりどりで心を和ませました。



一階ロビーには、家族また地域の方々の協力により、創作ドリル・押し花・パッチワーク等々を展示し、はなやかなものになりました。  
午後より二階八角棟において、踊りクラブの松田先生他の踊り、音楽療法法の岩井先生との合唱、マンドリンクラブの演奏、水戸黄門の寸劇、居合道の演技等、数々の発表に盛り上がり、盛大に行われた文化祭でした。次回の文化祭に向けて、作品作り等頑張っていきたいと思います。  
(記者名) 編集部





光井 芳子 様  
大正五年 八十四歳  
十一月 七日



猪野 坦 様  
大正六年 八十三歳  
十一月 六日



竹田イセノ 様  
大正三年 八十六歳  
十一月 三日



新谷 愛子 様  
明治四十四年 八十九歳  
十一月 九日



浅井スマ子 様  
昭和二年 七十三歳  
十一月 八日



溝端カメノ 様  
大正八年 八十一歳  
十一月 七日



菊池 民世 様  
明治二十九年 百四歳  
十一月 十八日



高橋 饗子 様  
大正四年 八十五歳  
十一月 十七日



尾崎 保 様  
大正十四年 七十五歳  
十一月 十四日



鷹羽ヒナエ 様  
大正十一年 八十五歳  
十一月 三十日



岡本 好延 様  
大正五年 八十四歳  
十一月 二十日

俳句・短歌コーナー

輪になつて 月見と芋の 松軒山

寒風に 吹き回されし 野菊かな

今日も来て 我が身をさすり 帰る妻

二人して 今日もかせぐか 山鳩は

中田 徳一

日がのぼる 今日も良き日と 手を合わす

木枯らしが 吹けば舞い散る 木の葉っぱ

冬椿 何を好んで 冬に咲く

黒沢 シメ

心より 花を愛する 友なりき

病みてなんぐん館を 離れてゆきぬ

日々に来る 青衣の人等 師走の廊下に

顔うつるまで みがきくれたり

光井 芳子